環海異聞

九

九0.9.

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

DK
18
.087
1807
RARE
No. 9

1909407

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

環海異聞巻之九

伊尓歌都蛤茂軫
伯多琉蒲尓孤道中記

其イルコーツカの地に滞留せし事已ニ九ヶ
年の星霜を経しにいつの時は朝に復
し云目あくもなく考しく月日を空給ふ事に
なかゞらも癸亥（享和三年なり）春三月のをしめと
覚へて町年寄ちを日本漂流の人ども
御用ゝ事は当御奉行処へ相替候ひ御かゝる
お屋ゟ与命下ゝ思なし何事とも弁へ思とも

上武笠崎

拾之人おもはしおりれハなりけ添し而其
其方とも御用之事ニ帝上へ百姓也
らゝ屋ニ為王命之義師役人到着也請
立仕迫右之人ニ伴ひ居立屋ニ者なれ各々
畏ゝ已ゝ居所引立まゝの用之調ひ得る
事無ニコライ新義等附添副参度歌ひ
其是ハ其ゝ出府しゝ彩度半しども如是幸
之時節なれとゴロジニチし是談也之事
帝都分日本漂着人なれ百姓也ら始
ア来ましし事なれバ彩おてもとくも聞重
其方補とも御法なれ依ゝ色ゝ門詰も

みなく誠にて町年寄同意せしハ此度日本
人より我等ども為通辞新蔵附添より何府
より度と為報ゆゑ一蔵と申せし根子にて新
蔵度皆々先方へ来ると其話彼中は何れも
承諾し各々申合一流に此報をしおせし
ハ私とも新蔵手段をなれたくハ何度も万端御合
にもてあるべく此れんこんは行くに同人付其へより何府
より分与申立処此度ハ以下知も無くむ王府
にハ日本通辞もあるべく唯居中をかりの度ゆへハ
何も報ゆゑ通むこと度に付如報府添一申しを
申度に乗く附添少しまゝ姫に乗候て各年

外廷ニ於テ諸請し人ニハ其外ニ各祿紫宋調
ハ其七日ヨリ覺ヘ之ニ此地ニ發足ニ
後処分運紗の着後并投引皆等始
三人ニあきへ且同室みなく右都府ハ
自由便利なれバ不用ニ之ものハ此地ニ而
賣ならハ要用の物ニ分置ましく始三人
之者ども

舵店　左太夫
水主　銀三郎
同　民之助
同　辰　義
同　清　義

同　八三郎
同　善六
同　義次郎
同　津太夫
同　儀平
同　左平
同　太十良
同　民之助

同如町を新宿と川越海里其向ふに車
馬は引替続いたしに後人先車にて名々

家連行多里しに車ハ武人のまとく枚七ツ
一家に付ひつるみ拂に武人のまとれバ七車にて
手拂しとて三条をみまりれハ各々其意に任
せ俄平ハ此時をキセロフ方にみてく家度乃
手傳義志多里しの永々骨折しとて枚
多の銀子など餞別志せまとぞ

利蘇御役人某之人

名ハ何にキレキサンタン何と云しと宮田双鷲乃
玉号の附多る皮袋を志里にかく円にハ道中
読文謚札と云ものみにや是ハ[illegible]驛にて
居れ新に根子なる漂流人此人ハ此蘇御に

と云然ては足を引ればボロクと云女人のよし
公用を始んと急足にもしまた下りれは花卿
と云ふもし氣屋し係牧子星の極好説
文を常中しとは云なから彼土俗居と云る処乃
豪邁の奇象勇剛果散とや云居き外格
三人の者へニコライ 彰義 附其く都合格五人
首途
足まし一車には三人のもとせる但し後人
は五人家とく都百八車なり七車と語
しと覚へ乃れは車は三人のもなる居し
志狀とは徒惰也 町年寄コロンチハ 町をなれとして送り

車三人の家処ハ囲ハ皮張にし為る物なり前ニ
入口あり其皮ハ屯に前へ為れ下ハ根ニ忘せるなり
こゝ両天の節ハ是ハ家れ始きく内ハ両人
向ひ合ひ居る故車の前に獨掛けなく敷ニ
なりかゝるの口なり其人獨ハかけ鍛の先ニ
皮紐ハ施し為るその物れ、始り也しる
是ハ是をむ先るの役人家為るにハ跡ハ付く
あり此跡の者先ニの敷へ学る故公用の便る
なりと其敷ニハ馬ハ引かけ侍史ニ小を為
延帰なき故なり且右も云皮帯の絵
府とも云屋き物役人襟ニかけ居る故宿ニ

大いに居る紹之者ニ在扱ひ行遠ひの事あれバ
檣柄に沿ひるなり彼國家車の製漂客ホ
の強く処まり常へさるかぬくしくあらゐに
同様能望難し比目和人稱しく大光に等
向也し是其言る処によりて始くこと状形の畧
然をとれり歌路用ゆ者ハ和府にて用ゆる物
とハ精粗の別あるのミにて大低れ同し
居中用ゆるものハ「キヒツカ」と唱ひ都下ニ為
用ゆる物ハ「コレイし」と名付し家車を和
漢ともに為輪なり其略なれるハ車前の事ニ
も小輪をつかなく牧疋しるに牽ゆる事

此三輪の箋便利あるによりて前の輪は形を
小なり後の輪にしてしく大り我方の大八車より
稍大なり前なる小輪後の後輪の半分程あり
此小輪に付二ツ方にしてあり其法く
三ツ一ツ為るに二ツ向ふなり是在其輪下へ落
右処は後の大輪と同等なり故法くの三ツ
橦木形のうで木をして是は前なる馬の狗乃
内へ跪は其跪は橫木の左右に後綱は付其綱
は引通しく車の基板の其形の角に絡
い當む故又其橫木の点中左右にしてあり
綱は左通しく後の馬の左右立て処に

給ひ童夏始めのことし先馬何丈にても其
如くになれなりも是は御はらきのハ車基乃
前にあるゝ櫻是ハ櫻は掛る基下の前に
調ゝる板はそれなる処あるゝ是に其足にぬるゝ
こけ居るかくしゝ其板丈の馬の口に付なる
手綱を一処に持ちて扱ふなり有人の意ハの
囲を熱神使ふなり其囲の高サハ車の上の
基板方屋頂をこえなる人のぬし意無に前に
是ハ後に式ハ但二の方ハ小サキなり左に硝子板
にしたるなる其板上にし前に角れ下る屋ハ後
あり風雨に節ハ是は下し角れ為をぐなり

人の入口は左右にある戸外へひらく此戸
はひらきば内に仕かけあるゝ其開くまづこは
踏張に乗居る調板を利是は のぼりくゝ内へ
入るなり又閉の外後のうちにまたなかるゝ木を
後者は是にのほり口中に網居上に多れ下る
は手に持て立居るなり誇罵人は先に立其
るの狗の前に鈴は下けて先へ其闇
は上りまたる鶴(タメナリ)も是は道中の苦もなり地迫
は車の前の横うぐ木に下るなり又左右入口
に前に洞に板を斜垂両に時は只は左右へ
翼のぬく下けかゝる是は車方を絵あがる

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

泥土を防く為なりて此活部府にて司る車
の根本なりて歌路の車も是と同しく簾略
なきものゝこなりてとあるに由又前の車の輪は一ツ
にしてて小サく志かるゝハ出行しなる
車右往左往に横に迫るんと行る時法くの
処の施轉によりて自由なる横に立まし
ゆるゆとする由彼国乃車ハ如此前後
大小三輪にしてて前の小輪の迫輪
によりて右か左か横へ迫る時自分をし
向きうちハ然りなる人の重こも前へ
かゝる故後輪ハ独手に進む是人力をかゝる

変かしく笑便の利を想しく西洋諸
國の車は三輪とする由是其製作は國々よりも
しかしいてたゝひある飯を見

車馬圖

同月八日六十里程彼里数之下日し 参里へハ驛場あり
此処にて写絶代由其名ふ覚以下も新名一々
不覚

此処運鉄城織布寸処乃様にて中処八日
の日乃何と中処の驛ゟ左太史清蔵病気に
付是ハ車馬駄ニ外速急反変ニ辞
様子あり是ゟ路次平坦(リン)にて左右山
ハまゆれども高山ハまへ江樹木ハ松
と樹木あり是あり
形状物産
の語ニ詳ゟ寸

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

同九日比弐百里程走り候由右左大夫清蔵
両人病気いたし候ニ付旅行中ニ而病死致候
故役人ニ頼ミ療治いたし其処ニ残し置候得
共追々差遣し候様被申候是より格式人
これ乗せ 追々老人ハ病中ニて外役ヲ勤候ニ不及ひ候ニハ病人様宰ニ不及イルコーツカへ送り遣ス由ニ候
病中ニ而ハ並木車ニ乗せ候ニ付食物も差餘
も車の上ニて為へ使用し外ハ下ニ而不申
病ヲ憂キ候故路程ニ候旅行幾日与申ス
地名とても無之候得ハ承も不仕候凡五千
里程も申処ニてカラスナトリツケと云処へ参
此処ニ請守候番処ニて候ニ付役人ニ附合の由とも

みなく根子とおもへ志いらく此処とくひ物と望
申し人家も余程みなくは但イルコーツカ程ハ
四里なくは秩と代皮ハ郷学と病院ハ可なりに
建く金根子なり川も名ハ覚牛関魚類の
市店もおもへ申し牛関ハ此処分イルコーツカへも
きスと望へ申し 此地の説なり
諸説

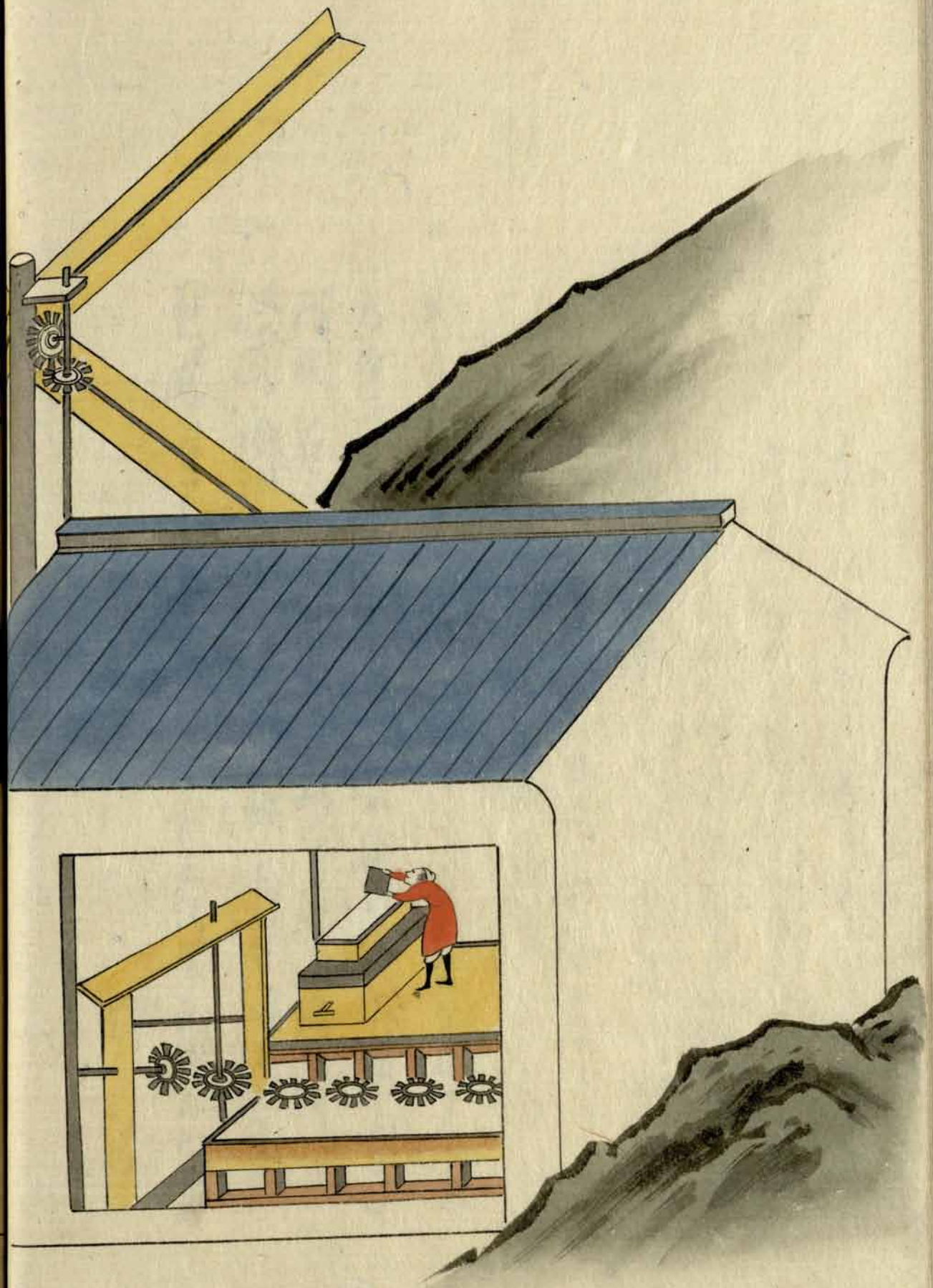
一 出立以来山との外ハ見へ候しの此辺よいまを
居申候居く雪多川との岸ハ氷い海多く舞ハ
居程次第と小へ向ひ来る根と覚ハ空事もイルコー
ツカ分ハ至りて寂しく四里

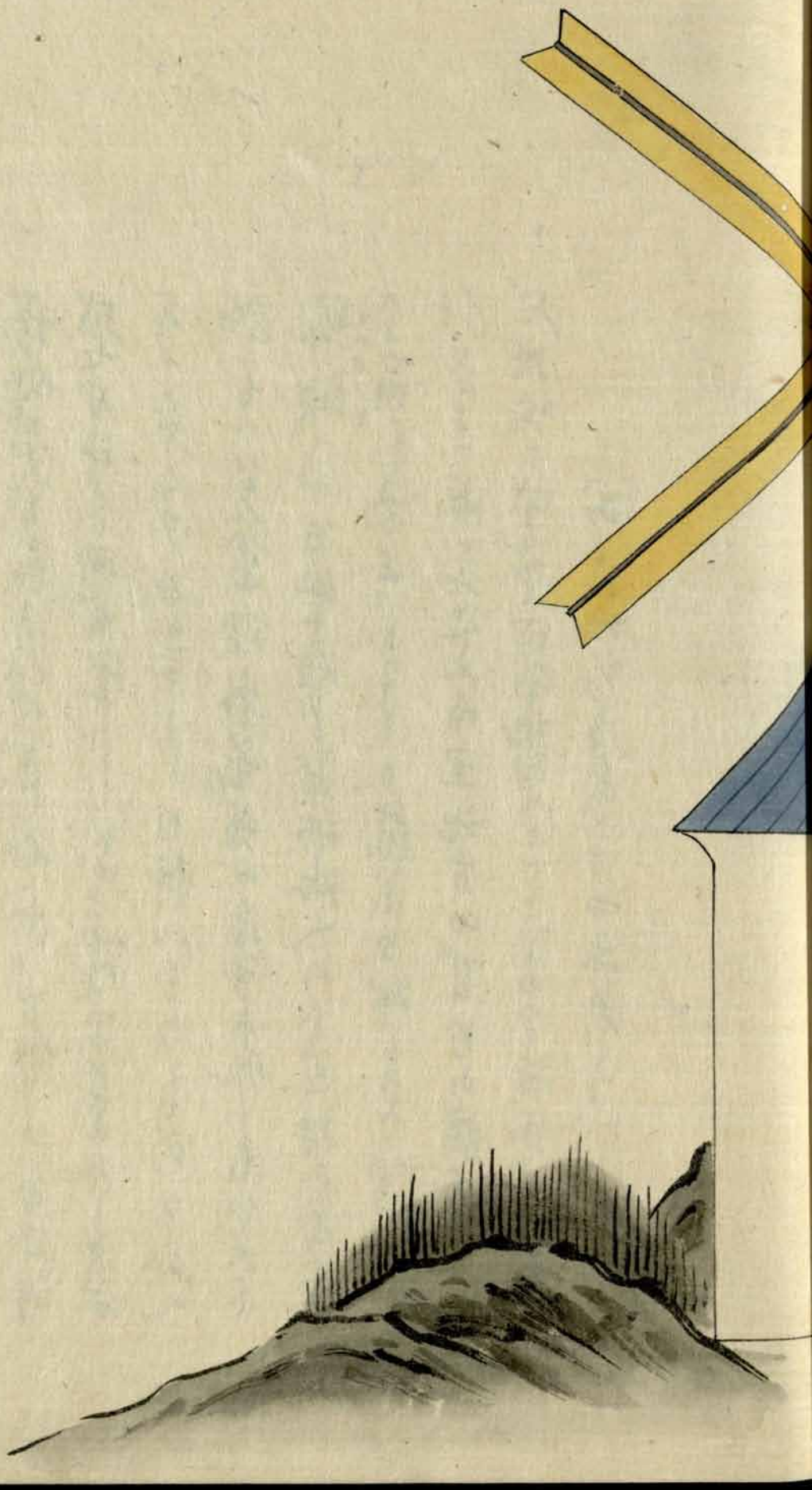
一 昼夜ともに車なきしらを百三格里又ハ百四十

里余も無ること為し

一 此辺分称称 横出に風車 処々仕かけ ワ中ニ 御ニ交

中し





一 此辺分十日目ど行室氣候之外絶く堪難よ
はどこ異由

一 場処志かと云ふ事は四月に入一比と共へ此に付路程
一七日斗之間日暮しと思ふ内皆もなく東方
あらくなる日出申し日輪八分はどこ行里処へ
先菓漂客等漂若の為体お帆しサンハ之
ヤウ家居し氷海へのまゝ迎相のなお
海之ニ到しか此処と日根に見て
扨ニ此辺止白里地方の其日の候すべくぬ
此なるとは其地志かとまへ為里此方住の家数
にあるの地行を夏と学由再考をべし

又此処より千百里程行ドンスケと云処へ着家
化是をとかまる度なしタルタリヤノ商家来
ると居るオロシイアノ人と雑居し根子なり此地の話説別に詳に
韃靼(タルタリヤ)人ハ眉黒く靴白く天窓ハ髪頭なり
帽子ハ既敢に　ぬけのあれ冠る凡て力量あ
りと云
夜まりもイルコーツカよりハ三ノ千里程ありと云
エカデンボルカと云処へ着
家化トンスケ日根ゝて変数ハ不足なり
此処より山とも遠くなる由

此処該屋にて処々諸詣堂あり由山頂は山乃
如く積重る様車此上より見えかけまるまゝか
しくべりこと云処へ著此処かべトルブルク
と云千三百里程有と云
人家皆石造りにて町屋も見ゝしく
イルコーツカ等よりは廣サ壹倍も有く
價四方ひしゞ多く地なりと奥数甚多く
價も安御しと云オシヤニレナなどもつれ田
鮫のことき大奥物屋の類々有此地の該説
別々詳を記之印一時に大熱有く熱牙
鞍浦小瘰有く面目を見れ甚しく

麻疹のぬき高神なるを依て呼吸促迫
強く旅行難平此処へ留立平愈
次第頭下を送る屋呉格いさしさを
是より強く格人に乗ゆし（主後生死に程難平皆に頭府
出立の節は豊台ふれ歩イルコーツ
カ出立の節彼地麻疹流行せしか詔に印も麻疹とく一の事にて
こなくなれ）
此処分何里行しやふ見カザとゆ処へ着
町家想しく石造りとくべり一ツ格甚タ繁盛
の埠下なり町の入口には此方のみ府梅門あり代
皮処あり此地タルタリヤの御埠のよし埠の前に大
河あり吉里半あり里と埠の石垣至てこなく築立
て上げてあり程人其上に塀囲あるくなるだ

堅固なる仕籠にて由埰門ふい寺もあり其寺
る波華の彰此処の名産にて ヲロシイア所ニ
一と学由價も必易しと云是近圃に種蒔にせる
麦我見るに皆頼りて此辺にあるものは見れば日
本のめしにて生成に我方も同しき
生麦を此邊にて初て見る事
車の損失せる我此処にて濯ひし在一夜
過留し多里但し夜中の方入在に町に乃
粮子も明細にいてと多に拠ゝガザンといカサン来
屋し友朋も加山と音徴せる詳説別に
次

加山分千里程も有しと云スクツ乃
大都ハ四月半頃と覚へて到着ハ[illegible]
[illegible]
一宿ス

此地総國の政府なり国王直親の高位人堺
代に居るよし町に数百町街居の廣り車馬
五ツ程ならへて通用ある程なり縦横ともに皆
舗石なり家軒下も舗石之家化ハ石
家にて美麗なり旅宿中しなりなども至て
殆講なり皆角に在口臭床なとも其造所失
実にして下分墨にあけ塗(スリ)つけ為る処漸
戸の[illegible]物の如し表面ハむ多などのうれ
[illegible]

かきりも我家せるを是に准し家内こゝ格子法ハ
是もこゝ不黄我正こせるを食料ハ蒸餅牛豚鶏
肉の類大低同し夏家れども其調味格別の
夏なるを
城市の男子ハ物語及ち附属諸人ハ相殺ゝ家
此地本性斗も多西面程もみてきとくく是を
きんとせバ四三年もかゝる屋し新朝ベトルブルク
よりハ大低一倍も廣かゝる屋し
桜ニベトルブルクハ我里枚四里程もみて
屋しと男田ハ芝居ようなくしりきハ
四里四方もみて屋し其詳なる夏ハ

詳説にあるを町を入口紹し方に小高キ所
を紅戸豊岩山のめくに四面眺望なる
処なるを其変に加給て寄及ある無るべかり
大筒を居へ来かる石垣を築あけ柱とな
しとハ尾屋四方明るなしなるを下地
熙輔石此点中に三挺ならべくあるを
去サ三寸程筒の徑縁をとも四人不寸位
あるを黄銅なるを説とし基へつなき来へ
前後へ自由に辺る鳴ゆらに仕かけ為る物
とも由大玉も二寸左右へ並へ来りり
其筒へ入れる程のものなれハふ怪大

造のこゝのなり
按ニ光太夫ノ記ニ流口ヘ入作向ヨシ
其手法のごとしは指先かし深くや
長サ三寸ゆるくれ見くや
但シ師相とよく稲猪を引ニ究各えは云云
又按職方外記莫斯哥未亜
條曰大銃長三尺七尺一發用
藥二石可容二人入内掃除
云云
此処より指四寸も屈るゝは迫迫に名ゆるに旦

鐘あるに土穴へ入る鐘のきし後に此三月就院
と申し屋を所の大サ三人程也る屋やか其屋かけハ
下へ落有居候ゆへ下し根無之は其穴の周ハ
下底分石垣を築こしあく又二十穴の熱也ハ
ハ四五間四方の石垣あり此大鐘何年何前なんの
為講あると云度等ハ望も留め候也右大鐘
大筒の処まハ六七人ツ 篇人附居あるも
按に光だまゝ記に大筒と日前に大鐘ハ産
昔ハ鉤産其内底へ下りしてゐる根
設しいつれ其大なる度云鐘に述ら
多き度に此産を重ヶ日本の四畳五百目

神主丹目仕辺千五百丹目丹之中 日本之丹目之丹

主万年辺る五十丹目 小山のまとくにまくやし

是ハ五杉辺ヶ岡の名物と所及彼国

主丹目ハ日本し四丹五百目とくり産四

丹目ハブートとやし

此大譜丹処の道所余程小さき処ニ三階化

の楼基ニ入ヘ寄ヲ 楼ニ是尼寺なるか先太史記文ニも有由

楼ムスクワハ世ニ処謂ムスコビヤなり彼ハ自

称しくムスクワ又モスコウと云 小極お地ニし

五度半ニあるの地と云唐土ニてハ莫斯哥未

亜と音訳せるハ例ムサクワ都府の夏こゝ都
府本府の名ハ訪ゝ全州の想名ともなれ是
皇林想州の名ハラロシイアなり是来我
邦にてオロシヤと云是なり漢人ハ「魯西亜
俄羅斯」「鄂羅斯」等の音訳数名を
ムスクワハ彼暦数五千三百年我正安式
年の比なりウラロシメルと云地なり之を
を遷せり此ハ王国なりしかへトルと云王の
代なり帝罰の国なれども其八十余年来
今のベトルフルカと云地ゝ新都ハ立て王居
とし之ハ旧都光族ハ埃代とし金也

光太史の話にめ帝半年ゆて新都旧都に代ゞ居住と望しは今は新都にのみ住居のみにすなれ箕使の要地なるなれ帝精粗の訳なおこ録に漂人等其都に一宿皆時の望なれば其望せる処実は一カ分一と云原し此都分新都を七百里程の都下のめくくもしく石にて其透にはあるに称を仰くことくく築坐の平石垣の垂居となる鼻(平の和)湿処は大丸太をならべ其上に土物垂補石物なし平地のふとくなれなれ敷下にこの路程路様云ものなるし海辺の左右無嶺

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM

原ニて田圃ハなし遠く山ニ至ゆるとなり
是中川ニ当（指ス）私渡しのおしし
也省徒の孫ニも万迄くある人家
ハいつれも大造なれども木造里のこと
其甚雪ニハあいれ也川ニ所も是
ば
小の方ニ向ひて行と笑へ四月九六日ご詣
ベトルブルカの都府へ着ハイルコーツカ三月
七日發足ニ着ると四十八日と笑由
按光太夫の記ニイルコーツカを立て
是法五千八百二十三里を四十四日ニして

ヘーブルカは名に居中車馬こゝ並夜百里程
ツくをしらず夜実に目眩き腸胃轉倒になるかく
かゝく場へかゝるかなきは月行キリロウイチと云車
は月車なり此車は楽しき処甚平穏なしとて
おしも才祥郎揺せらるゝ事なりとお此車の製度
格る精巧三万金体費にしと望れり

ムスクワよりは七百里なりと云ふを幾日目に至りし
かはくに車を急げば一七日にて至るとなりとお
云ふなり是を七千里の居中都邑村落牧十
ヶ処ありしを其様の早居なれは是等は暇
らなりしまゝ送帳と云居し但し諸法にし
来りしく物語れる地名右に其処なり是等

他の説説に云々其地形土俗の大略体別に
詳しく
上着良刻 附添し役人こゝ安某と云人の餞
連行刻此処の表長屋と云屋き処の二階に
至て旅亭と云也
是ハセナトルと云岩安六人のこ内にて
ニコライバイトルイチユニンゾフカラフと
云人の餞の由セナトルハ政務を能る
人にて国光と云夏と学由六人を一白
に云かごと云カラフと云夏を下に
連て稱稱する六員の内二員をて

セナーツカの内にて格おなる事の由
リユニンゾフを人々ガラフ〳〵と称
をし由以下カラフとのこ記せるハリ
ユニンゾフの事なり
按に和葉る侯爵をガラーウと云
ガラウかなしば此事なる原なり

追て承へば此ガラウ想ふ外国し事に
扱ひ係ひ紙葉と云故に此度日本侯節に事
并漂流人イルコトツカより呼覚せし事
皆此人の元斗ひなりと依て旅宿に去故
内と意の内帰て節を清留中此人の

右扱ひこと程々厚重のを活に請せる彼
も屋をも町家の並にして廣サ西半町の方
ある三重門なり大門なり才或重門南の銀
陝炮番兵西人を置き才三重門は石ヲ畳ミ
あける寺の廣門のことく入口丸くして龍は板
なり家になぎなるのめよこものを肩分打越に
うけ多くその蕃をなし此人列上へ出るこのゝ
右次第なるなり
日日晩居中石連乳氣に後人若深何もガ
フの前へ石出せる右三重門を經て先堂上へ
外ル順々階をの月望二階の上へ至て毎階に

面猪子障子なるを

かくのゆく四方猪子障子取せこに居る人就こ
とくくらつるなるを追ひて宮へもおしかるを
同しく大小のちかひみてのとく
其席上四襲にハ猪子にて類猪子の張画ハ鳥
獸草木の人物の並へあるを中補いのさらば板
補にくまし仕切あれども結合其圖の墨にて
四方墨以上程し廣サにて由皆し居並て家
なるとをしばあるし四方席へお附添役人お
取にて引せ給ひしかハカラフ正面に於て其
伯母なるを云人も倶に御陪従し者四五人

も其左右に候ハがうつ何もへ重ハ月に一の段
路々の御持ハ月に御右扱と遊が高帝ハの思召
なりとて同行の程津右更後平左平
太十郎義十郎已之助六人のものハ何卒本
国へ御朝仕度旨相答 外国人之者とも度ハがうつ
列々云る候
再び申されしハ其国極の度なり我帝王
ハ外国の人を取しと陸舗思召され格別憐
之もかへぬ事度なれハ各何も此ノ路をひに及ハ候
必ず度居るへしと熟に申されし
此時ニコライ新義も祭上度旨れども
此度同行し事度ハ未タ言上ニ無御

なに同席せられしの陪添の役人其後身体
カラフへやおしら拵にて皆々目通りも添て後新
発お暇味お委細の事もと尋ね報なり

一 ガラフの彼師ニ人ハ無地色一種所のお織の如き地
地着金銀をて所を附せるものなり其円なる表衣
ハ其面積 拵に目見せし帝王の 此拵帝日拵にて云へ為也

一 伯母君なりと云人おられしハ日本のまゝの
為と思ひる 紫東ハ近与目見せし皇后の 正服と日拵に覚へ也

一 其後各々を伴ひ覚し役人往来情なく日本
深流人ハ百連れし始末宮舗とく其所加
らなり金ハ多内なり鷹黄せられしと当りし

一 帰留中の銷足を用ひきるゆゑにしなる調味也
毎日三ヶ度朝は一通の朝菜の子とも云ふ事
是晩は料理吉人出へ九通程にて吉かくおゝ
食盤牧脚を兼へ其上ゝ兼列 強仕人附
猪手は料理人ゆゑ能ゝに仕おゝ格子也
一 蒸餅に添る貴は塩所ゝ牛肉鶴肉の事は
菜ゆゑ入貴多るものなり其余豚肉野羊
羹ゝ魚鯰種ゝあり
右貴ゝ料なるは菜一椀程も入らぬなり
漂名は後者処より菜粒を加ふるなり
本のまゝ

料理大低右之如く一ニハ差へ候酒ハ一日ニ二
度ツヽ食時の時いまハ皆麦(バク)礦(ビヨウ)なれとも風味至而
宜浦蒲萄酒もかしあるよ

カラフの宅逸留中ニ有雑事

一 彼内人数七百人程至(アリ)ニ采地の人数百家宝
事とする由表通ハ大低男子をかすこ由婦人ハ
稀なるよ

一 采地ハ其処分鶏しく麦体運送ある様見る
事

一 鳧既式ハ紫色卵黄色石ニ之厚四寸斗
大サ長五ニ往ニ製しある平盤の札のかを持

丢脚太く床にて据る喞筒の居室ある
云ねる時用石の名ふうしと云由
此石異ハ傘寺院の柱よ志るありも角なくて
多く外し細工ねとも多るてこへく煙管
まても製しあるもとて交あるも

一 様々なの書当くも騎しく童旅あり紙製
一 ガラフ細行の節ハ車つるに乗て六尺つるのなん鳥
丈ハ錦ありるも従者の見へ気供の知らし
車の後ハ供六人附きあるも其余外に持もなる
ハあし

一 館内ふ宅の内に至り実たか堂ふ処ありて

其中一つ玉櫻こゝ種しの植ものみ其色もの用
ひ猪子板なりて圍丁ありて時し温暖冷蒸加減
をなし一つ玉ありひらかせ実ありしむるなり此
其五月比と覚へて梅桃すべて桃の実ありしが
多くあみ多くも土地ことに玉石如此無なること内に蓋
ハそれバ蓋嘆と云事しなきと也

一 ガラフの家莊ありて物に行しなり其内にて別
多くものハ孔雀なども畜ひ置けり詳植に已し
奇草異木数多あり此処ハ帝王の遊苑乃
西にあるもカナスダと云湊もこゝ申るなり

一 此彼中にこゝ人に云しハ今より七日まへに

この都に着しなば此国にひらきし大祖の百
年忌にて大祭事有しと云しけり
拙魯西亜記譜読に伯多琉第一世祖
彼一千六百七十年（寛文十二年之）一千七百二
十五年二月殂スと有り是享保拾年
にしらく（享保年六十 四月と云由）此祭に亥を八十年
なるか徳を百年忌にてハ（アル）あらし彼一
千七百零五年（宝永二年）ならハ祭に亥を一百
年なり漂流人傳聞ある処ハ他に祭
事先代誕辰なるの祭事にあらしや一体
年御祭りて云事ハなき給ふも当由又

其里志ニ我ハ享保十年 暦数一千七百二十五年

ニあるゝ此都をあらさに造立せるゝ事由

まらゝ此年を八十年ニ度ゝ式ハこの偶

数を得る程度にもあるし云

王上へ目ゝ人由ハ日本殿の若用行命ニ

里ニ家いつれも若古し不持ニ殿里立ハれバ

ヱノスタノコレゲと云役処へ行ゝなるゝ此処ニて

於人前路しの衝丈寸法をあるゝ其後仕立

お来るゝとゝ実ニ行ゝ事ニ此役処ニ居られ

るゝ 誇編子の若相なしいゝ

みたるゝ二下ホなり

皆しおけしゝ時ハ毎度車ゝるのせられ（ノセタル）日人家

てしく悌其外も彩飾を盡して作りたる
車なりし以大なるしく雲年氏車あるこハ延鉄
取添し皮取たりし連をめハ申しくまる根ゝ
なる是車轄し動しても人の輝く致ゝ悪
うしゝしゝなるをのなりし消子板ゝく外のなる遠ゝ
思粮しく其内ゝハ菌取蒲内なりハ終補
たまをあるしくまる（秦のこと）騰の立る纒ゝみけみく是ゝ
気纒取つけ是ゝ御気纒取怨け鏃の如きを
まのつる是取をむ車のあくハ供取人立る
玉王乃軍旅千五百人のまなりと云ぬ取けて
多りて長六拾五尋左右表の方とんもて石火矢

乃宮殿三階化なるも檜ハ才一階の上に在る和
庭にハ鉄又ハ石ヲ積ミ是に而足ハ空く居る
為なるも其上に兵粮なるべし牧十の所楠ハ綜(タクワ)ふ
仕切あるべし祀ハ亦処軍兵の居る処とあるも
彼国の和造るハ祖爪の刻ある如きものなるも

環海異聞巻之九終

ALASKA HISTORICAL
LIBRARY AND MUSEUM